

VMware vRealize Orchestrator 8.1 リリース ノート

vRealize Orchestrator Appliance 8.1 | 2020 年 4 月 14 日 | ビルド 15995344

リリース ノートを頻繁に確認して、最新の追加情報や更新情報を入手してください。

リリース ノートの概要

本リリース ノートには、次のトピックが含まれています。

- [vRealize Orchestrator 8.1 の新機能](#)
- [VMware vRealize Orchestrator 8.1 アプライアンスの展開](#)
- [vRealize Orchestrator 8.1 へのアップグレードおよび移行](#)
- [root パスワードの有効期限の延長](#)
- [vRealize Orchestrator 8.1 とともにインストールされるプラグイン](#)
- [利用可能な言語に関するサポート](#)
- [フィードバックを提出する方法](#)
- [vRealize Orchestrator の以前のリリース](#)
- [解決した問題](#)
- [既知の問題](#)

重要

KB 87120 の手順を実行した後にアップグレードが失敗する

KB 87120 に記載されている CVE-2021-44228 および CVE-2021-45046 log4j の脆弱性に対処するために使用される手順を実行すると、vRealize Automation および vRealize Orchestrator 8.6.2 以前でアップグレードが失敗する場合があります。回避策については、[KB 87794](#) を参照してください。

vRealize Orchestrator 8.1 の新機能

使いやすさの向上と DevOps の自動化

vRealize Orchestrator 8.1 では、vCloud Suite および VMware Cloud Foundation を使用して最新のデータセンター インフラストラクチャを運用している IT/クラウド管理者と DevOps 管理者の生産性、効率性、および有効性を向上させる強力な機能拡張が提供されます。主要な機能は、次のとおりです。

- **階層フォルダのツリー ビュー。** vRealize Orchestrator 8.1 では、階層フォルダのツリー ビューのサポートが再導入されたため、ユーザーは vRealize Orchestrator オブジェクトを階層ツリー ビューで編成、表示、および参照できます。ツリー ビューにより、大規模なオブジェクトの管理が容易になり、編成したすべてのコンテンツをグローバルに表示できるようになります。「[vRealize Orchestrator クライアントでのフォルダまたはサブフォルダの作成](#)」を参照してください。

- **アクションの実行およびデバッグ。** アクションを実行およびデバッグする場合、アクションをワークフローに追加してからワークフロー実行を行う必要はなくなりました。各アクションは関連付けたワークフローの実行前に単体テストが可能で、これによりワークフロー開発が高速化されます。「[アクションの実行およびデバッグ](#)」を参照してください。
- **ワークフロー スキーマのデバッグ。** ワークフロー スキーマ内の特定の要素にブレークポイントを設定することで、ワークフローをデバッグできます。「[スキーマ要素別ワークフローのデバッグ](#)」を参照してください。
- **変更セットの Git ブランチへのプッシュ。** Git リポジトリでコンテンツをバージョン管理している場合、vRealize Orchestrator では、変更セットを選択して構成し、Git リポジトリからさまざまなブランチにプッシュすることができます。これにより、ユーザーは標準の Git 操作で vRealize Orchestrator コンテンツを昇格できるようになります。「[Git ブランチを使用して vRealize Orchestrator オブジェクト インベントリを管理する方法](#)」を参照してください。
- **複数のスクリプト言語：PowerShell、Node.js、Python。** vRealize Orchestrator 8.1 では、次のスクリプト言語がサポートされるようになりました：PowerShell、Node.js、および Python。これにより、JavaScript 以外のユーザーによる vRealize Orchestrator のアクセスと使用が向上しました。「[Python、Node.js、PowerShell スクリプトの主要な概念](#)」を参照してください。
- **Syslog のサポート。** 1 台以上のリモート Syslog サーバへの情報の収集を構成できます。「[Create or Overwrite a Syslog Integration in vRealize Orchestrator](#)」を参照してください。
- **vSphere 6.7 プラグイン API のアップデート。** vSphere プラグイン API はアップデートされ、バージョン 6.7 をサポートするようになりました。

[重要] 機能およびサポートに関する注意事項

- Python、Node.js、および PowerShell スクリプト言語は、vRealize Automation ライセンスを使用する vRealize Orchestrator インスタンスでのみ使用できます。
- ワークフロー、アクション、ポリシー、構成、リソースなどの vRealize Orchestrator オブジェクトの複製オプションは、ツリー ビューでは使用できません。カード ビューからオブジェクトを複製できます。
- プレインストールされている vRealize Orchestrator アクションは複製できません。このようなアクションを複製するには、新しいアクションを作成し、関連するスクリプト、入力パラメータ、および戻り値のタイプを手動でコピーします。
- vRealize Orchestrator の内部コンテンツの同期により、サービスの起動が数分遅れる場合があります。このため、フェイルオーバー イベント時またはクラスター ノードの障害時に vRealize Orchestrator サービスが使用できなくなる可能性があります。
- vRealize Orchestrator 8.x では、SQL プラグインの JDBC コネクタを追加するための新しい手順を導入しています。「[vRealize Orchestrator SQL プラグインの JDBC コネクタの追加](#)」を参照してください。

VMware vRealize Orchestrator 8.1 アプライアンスの展開

vRealize Orchestrator Appliance は OVA ファイルとして配布される VMware Photon OS ベースのアプライアンスです。内部 PostgreSQL データベースを使用して事前にビルド、構成されており、vCenter Server 6.0 以降で展開できます。

vRealize Orchestrator Appliance を使用すると、VMware クラウド スタック（vRealize Automation、vCenter Server を含む）と、お使いの IT プロセスおよび環境を、すばやく、簡単に、低コストで統合できます。

vRealize Orchestrator Appliance を展開する手順については、「[vRealize Orchestrator Appliance のダウンロードと展開](#)」を参照してください。

vRealize Orchestrator Appliance サーバの設定の詳細については、「[スタンドアローン vRealize Orchestrator サーバの構成](#)」を参照してください。

vRealize Orchestrator 8.1 へのアップグレードおよび移行

マウントされた ISO イメージを使用して、スタンドアローンまたはクラスタ化された vRealize Orchestrator 8.0 または 8.0.1 展開を最新の製品バージョンにアップグレードできます。

vRealize Orchestrator Appliance のアップグレードの詳細については、「[vRealize Orchestrator のアップグレード](#)」を参照してください。

vSphere で認証されたスタンドアローン vRealize Orchestrator 7.3 ～ 7.6 インスタンスを vRealize Orchestrator 8.1 に移行できます。vRealize Automation で認証された、クラスタ化された vRealize Orchestrator 7.x 環境を移行することはできません。

vRealize Orchestrator Appliance の移行の詳細については、「[vRealize Orchestrator の移行](#)」を参照してください。

root パスワードの有効期限の延長

重要：セキュリティ上の理由から、vRealize Orchestrator Appliance の root アカウントのパスワード有効期限は 365 日間に設定されています。アカウントの有効期限を延長するには、vRealize Orchestrator Appliance に root としてログインし、次のコマンドを実行します。

```
passwd -x number_of_days name_of_account
```

vRealize Orchestrator Appliance の root パスワードが永続的に保持されるようにするには、次のコマンドを実行します。

```
passwd -x 99999 root
```

vRealize Orchestrator 8.1 とともにインストールされるプラグイン

vRealize Orchestrator 8.1 をインストールすると、デフォルトで次のプラグインもインストールされます

- vRealize Orchestrator vCenter Server Plug-In 6.5.0
- vRealize Orchestrator Mail Plug-In 7.0.1
- vRealize Orchestrator SQL Plug-In 1.1.4
- vRealize Orchestrator SSH Plug-In 7.1.1
- vRealize Orchestrator SOAP Plug-In 2.0.1
- vRealize Orchestrator HTTP-REST Plug-In 2.3.5
- Microsoft Active Directory 3.0.10 用の vRealize Orchestrator Plug-in
- vRealize Orchestrator AMQP Plug-In 1.0.4
- vRealize Orchestrator SNMP Plug-In 1.0.3
- vRealize Orchestrator PowerShell Plug-In 1.0.14
- vRealize Orchestrator Multi-Node Plug-In 8.1.0
- vRealize Orchestrator Dynamic Types 1.3.5
- vRealize Orchestrator vCloud Suite API (vAPI) Plug-In 7.5.1

利用可能な言語に関するサポート

vRealize Orchestrator 8.1 は vRealize Orchestrator コントロール センターおよび vRealize Orchestrator クライアントの複数言語対応を可能にします。

フィードバックを提出する方法

お客様からのフィードバックをお待ちしております。次のいずれかの方法でフィードバックを提出してください。

- サポート リクエスト (SR)
- [vRealize Orchestrator コミュニティ フォーラム](#)

サポート リクエスト

発生した問題はすべてサポート リクエスト (SR) として提出してください。これは、VMware に別の方法で報告している問題についても同様です。

VMware のサポートの詳細およびサポート リクエスト (SR) の発行方法については、[VMware の公式サポート提供ページ](#)を参照してください。

SR にはログ ファイルも添付してください。

vRealize Orchestrator のログを生成するには、以下の操作を実行します。

- 1.vRealize Orchestrator Appliance のコマンド ラインに **root** としてログインします。
- 2.*vraccli log-bundle* コマンドを実行します。

結果：ログ バンドルは、vRealize Orchestrator Appliance のルート フォルダに生成されます。

vRealize Orchestrator の以前のリリース

vRealize Orchestrator の以前のリリースの機能と問題については、各リリースのリリース ノートに記載されています。vRealize Orchestrator の以前のリリースのリリース ノートを確認するには、次のいずれかのリンクをクリックしてください。

- [vRealize Orchestrator 8.0.1](#)
- [vRealize Orchestrator 8.0](#)
- [vRealize Orchestrator 7.6.0](#)
- [vRealize Orchestrator 7.5.0](#)
- [vRealize Orchestrator 7.4.0](#)

解決した問題

- **GitLab 統合の設定時に SSH アドレスを検証できない**
SSH アドレスを追加し、検証ボタンをクリックすると、次のエラーが表示されます。エラー:
org.bouncycastle.util.io.pem.PemGenerationException: 不明なオブジェクトが渡されました - エンコードできません。
- **vRealize Orchestrator 7.x から 8.0.1 に移行した後、Active Directory でインベントリ内のすべてのブ ラグイン フォルダを表示するまでに長い時間がかかる**
この問題は一貫して確認されているわけではありませんが、まれに、移行した後、vRealize Orchestrator クライアントに Active Directory のインベントリがすぐに表示されないことがあります。
- **ワークフロー設計者が vRealize Orchestrator Client で作成したポリシーをワークフロー設計者が自ら実**

行できない

ポリシーを作成した後、ワークフロー設計者が **[実行]** をクリックした場合を例にします。この場合に、**[ポリシーの実行]** 画面に移動すると、ワークフロー設計者が開始したポリシーの実行が停止状態と表示されます。

- **単一ノードを vRealize Orchestrator High Availability (HA) 環境に参加させると、401 認証エラーが発生する**
1つのノードを vRealize Orchestrator HA 環境に参加させた後に、vRealize Orchestrator クライアントにアクセスすると、401 エラーが発生します。このエラーは、vRealize Orchestrator ノードが vRealize Automation で認証されている場合にのみ発生します。
- **vRealize Orchestrator Appliance ディスクのサイズを拡張してもオペレーティング システム (OS) レベルで反映されない**
vRealize Orchestrator 8.0.1 アプライアンスのディスクのサイズを拡張しても、変更が OS に反映されません。 `vracli disk-mgr resize` コマンドを使用して自動サイズ変更を手動でトリガしても、新しいディスク容量にはアクセスできません。

既知の問題

既知の問題には、次のトピックが含まれます。

- [構成の問題](#)
- [移行/アップグレードの問題](#)
- [Web Client](#)
- [その他の問題](#)
- [以前の既知の問題](#)

構成の問題

- **vRealize Orchestrator コントロール センターのコンテナが起動に失敗し、ブラウザで開くことができない**
この問題は、`/data/vco/usr/lib/vco/configuration/log/catalina.log` ファイル内のエラーが原因で発生します。
回避策：
1. 次のコマンドを実行して、停止した `vco-app` ポッドを再起動します。

```
kubectl -n prelude delete pod vco-app[id]
```


2. 数秒後、そのポッドが削除され、新しいポッドが展開されます。

```
* vco-app-[id_new_deployment]      3/3   Running    30      4d6h
```
- **vRealize Suite Lifecycle Manager を使用して高可用性環境を展開またはアップグレードすると、vRealize Automation を初期化するときの制約違反のために起動に失敗することがある**
展開後またはアップグレード後に、`vco-control-center` コンテナ ログに次のエラー メッセージが表示されます。

```
<log_date><log_time>[localhost-startStop-1] ERROR {} [DbConfigurationInitializer] 初期構成データの作成に失敗しました。原因: クエリが一意の結果を返しませんでした: 2;
```

回避策：

1.vco-app レプリカを 0 にスケーリングします。

```
kubectl -n prelude scale deployment vco-app --replicas=0
```

2.vracli dev コマンドを実行して、vmo_contentversioncontrol に repositorytype = 'INTERNAL' の複数のレコードがあることを確認します。

```
vracli dev psql
```

```
\c vco-db
```

```
select count(*) from vmo_contentversioncontrol where repositorytype = 'INTERNAL' group by location;
```

```
select * from vmo_contentversioncontrol where repositorytype = 'INTERNAL';
```

3.次の SQL クエリを実行して、追加のレコードをすべて削除し、vmo_contentversioncontrol に 1 つのレコードのみを残します。ここで、{extra_record_id} は、削除する必要があるレコードの ID に置き換える必要があります。

```
delete from vmo_contentversioncontrol where id='{extra_record_id}';
```

4.psql インタラクティブ ターミナルを終了します。

5.vco-app レプリカを 1 にスケーリングします。

```
kubectl -n prelude scale deployment vco-app --replicas=1
```

6.vro ポッドの準備が整い、ポッドに 3/3 の使用可能なコンテナができるまで待ってから、vco-app レプリカを 3 にスケーリングします。さらに 2 つのポッドをデプロイする必要があります。

```
kubectl -n prelude scale deployment vco-app --replicas=3
```

移行/アップグレードの問題

- **高可用性 (HA) の vRealize Automation 8.0.1 環境をアップグレードした後、組み込みの vRealize Orchestrator クライアントのツリー ビューに重複したフォルダが表示される**
vRealize Automation 8.1 へのアップグレード後、組み込みの vRealize Orchestrator クライアントのツリー ビューに、同じ名前の複数のフォルダが表示されます。いずれか 1 つのフォルダが使用されており、他のフォルダは空である可能性があります。同様の問題が、高可用性 (HA) の vRealize Automation 8.1 の新しい展開でも発生することがあります。

回避策： [ナレッジベースの記事 KB78958](#) を参照してください。

Web Client

- **保護された Git ブランチへのコミットのプッシュ時にエラーが発生する**
構成された Git ブランチが保護されている場合、プッシュ操作は常に失敗しますが、受信するメッセージではプッシュは成功したと示されます。

回避策はありません。

- **カード ビューから 20 個を超えるオブジェクト カードをロードできない**
2K 以上の解像度を使用するようにディスプレイを設定した場合、または高さが 1080 ピクセルを超えるカスタム解像度を設定した場合は、カード ビューで 20 個を超えるカードをロードできません。

回避策：ディスプレイの解像度を最大で 1920×1080 に設定します。または、他の解像度を使用する場合は、ブラウザ ウィンドウのサイズを変更して、スクロール バーが表示されるようにします。

- **ツリー ビューに [複製] ボタンが見つからない**

ツリー ビューでは、フォルダまたは個別のオブジェクトを選択しても、[複製] ボタンが表示されません。

回避策：アイテムまたはフォルダを複製する必要がある場合は、カード ビューに切り替えて、[アクション] メニューから [複製] を選択します。

- **ワークフローの検証エラーが、エラーを解決した後もワークフローで保持される。**

エラーを解決して検証済みのワークフローを保存した後、検証エラーがワークフロー スキーマから消えません。

回避策はありません。

- **プル操作とプッシュ操作の完了に時間がかかる**

場合によっては、vRealize Orchestrator クライアントから統合された Git サーバへのプル操作とプッシュ操作が 2 分間続きます。

回避策はありません。プル操作またはプッシュ操作が完了するまで待機します。

- **OGNL で「__current」変数を使用している場合、レガシーのプレゼンテーション検証を含むワークフローを実行すると、常に失敗する**

ワークフローが Orchestrator レガシー クライアントで作成されており、OGNL カスタム検証スクリプトで「__current」変数を使用している場合、フィールド値が SDK オブジェクトの場合、vRealize Orchestrator クライアントからの開始に失敗します。

回避策：ワークフロー XML の「__current」変数を実際の変数名に置き換えます。

- **新しいランタイムでカスタム決定要素のスクリプトを実行すると、エラーを受信する**

JavaScript 以外のランタイムは、カスタム決定要素のスクリプトをサポートしていません。

回避策：Python、Node.js、または PowerShell スクリプトにカスタム決定のスクリプトを追加しないでください。

- **ユーザーがアクセス権のないコンテンツに対する Git の変更を破棄できる**

ワークフロー デザイナ権限を持つユーザーは、アクセス権のないコンテンツに対する Git の変更を [Git 履歴] ページから破棄できます。

回避策はありません。

- **プラグインのポリシー テンプレートと構成要素がロック解除され、編集できる**

プラグイン固有のポリシー テンプレートと構成要素がロック解除され、ユーザーはオブジェクトを複製せずに編集できます。

回避策はありません。

- **プロパティおよび配列/プロパティ タイプは、デフォルトの外部ソース値を持つことができない**

ワークフロー入力フォームでプロパティおよび配列/プロパティ タイプに外部値を使用すると、正しいアクションが表示されません。正しいアクションを設定できた場合でも、入力フォームには検証時に無効な値が入力されます。

回避策：複合タイプの入力パラメータを使用します。

- **ブレインストールされているアクションは複製できない**

標準の vRealize Orchestrator ライブラリに含まれるアクションを編集する場合は、最初に関連するアクションを複製する必要があります。アクション カードに [複製] ボタンがないため、アクションを複製できません。

回避策：同じ入力パラメータ、戻り値のタイプ、およびスクリプトを使用して空のアクションを作成します。

- **ブレイクポイントが、[バージョン履歴] の視覚的な差分ビューで有効になっている**

ユーザーは、視覚的な差分ビューで要素とスクリプト可能タスクのブレイクポイントを配置することができます。

回避策：ブレイクポイントは視覚的な差分ビューでの使用がサポートされていないため、配置しないでください。

- **vRealize Orchestrator クライアントで、名前に下線文字が含まれるタグが使用されている**

vRealize Orchestrator クライアントでは、3 文字未満のタグ名または空白文字が含まれる名前はサポートされていません。名前が短いオブジェクトから自動生成されたタグにはすべて、末尾に「下線」が付加されます。また、空白文字はすべて「下線」に置換されます。

例：Orchestrator レガシー クライアントの「/Library/project A/app/DR/backup」に配置されているワークフローでは、vRealize Orchestrator クライアントに次の自動生成されたタグが含まれています。

「Library」、「project_A」、「app」、「DR」。

回避策：vRealize Orchestrator クライアントで新しいコンテンツを作成するときに、提示されたタグ付け規則に従います。

- **[バージョン履歴] ページに、現在のバージョンの不正確なデータが表示される。プッシュ操作を実行すると、コンテンツに対して行われた最後の変更が表示されなくなる**

このエラーは、複数のオブジェクト エディタが同時に開いた状態で、1 人以上のユーザーが変更を行っている場合に発生する可能性があります。たとえば、ユーザーがブラウザの別々のタブで vRealize Orchestrator ワークフローと vRealize Orchestrator アクションに変更を加える場合です。ワークフローとアクションの両方にいくつかの変更を加えた後、ユーザーは変更を保存します。ワークフローへの変更を保存した後、ユーザーは、更新されたワークフローを統合された Git リポジトリにプッシュします。ワークフローの変更を Git リポジトリにプッシュすると、以前に保存したアクションの変更は失われます。

回避策：Git リポジトリとの間でコンテンツをプッシュまたはプルした後に、エディタを再度開きます。他のユーザーが行ったローカルの変更がある場合は、[Git 履歴] ページからプッシュしないでください。プッシュする前に、ローカルでの変更がコンテンツに対する最後の変更と一致するかどうかを確認してください。

- **スケジュール設定されたワークフローの実行が、UTC 時間に時間オフセットされた予測時間とは異なる時間にトリガされる**

`*workflow.scheduleRecurrently()` * 関数を使用するスクリプトを介してワークフローの実行をスケジュール設定すると、スケジュール設定されたワークフローは常に UTC 時間でトリガされます。UI はブラウザのタイムゾーンを繰り返しパターンに追加するため、vRealize Orchestrator クライアント UI と関数の動作の間には不一致があります。ただし、関数を使用する場合、タイムゾーンは繰り返しパターンに含まれず、ワークフローの実行をトリガする時間の計算は、サーバ側で UTC 時間で実行されます。

回避策：スクリプトでワークフローの実行をスケジュール設定する場合は、UTC 時間の値を使用します。

- **戻り値タイプの問題のため、入力フォームの外部ソースとしてアクションを選択できない**

vRealize Orchestrator クライアントの [入力フォーム] タブで、デフォルト値または値オプションに対して Any または Array/Any のいずれかの戻り値タイプを持つアクションを選択できません。

回避策：

- 1.vRealize Orchestrator クライアントにログインします。
- 2.ワークフローを選択し、[入力フォーム] タブに移動します。
- 3.ウィジェットのデフォルト値または値オプションから期待される戻り値タイプを使用してアクションを設定し、変更を保存します。
- 4.デフォルト値または値オプションのアクションを選択してワークフローを保存し、アクションを以前のバージョンに戻すか、戻り値のタイプを Any タイプに戻します。

- **Orchestrator レガシー クライアントで作成されたワークフローが重複すると、値オプションに外部アクションではなく定数が表示されることがある。**

Orchestrator レガシー クライアントで設計され、vRealize Orchestrator クライアントで複製されたワークフローの入力パラメータを編集するときに、値オプションが外部アクションではなく定数として設定されることがあります。

回避策：[入力フォーム] タブに移動し、必要な外部アクションを含めるように入力パラメータのプレゼンテーションを編集します。

その他の問題

- **vCenter Server プラグインがポリシーをサポートしていない**
vRealize Orchestrator 用の vCenter Server プラグインでは、管理対象の vCenter Server インスタンスで発行されたイベントを、ポリシーを使用して監視することはできません。
- **新しい vRealize Orchestrator バージョンで作成されたパッケージを以前のバージョンにインポートすると、エラーが発生することがある**
vRealize Orchestrator バージョン間の互換性の問題が原因で、新しい製品バージョンで作成されたパッケージを以前のバージョンの vRealize Orchestrator 展開にインポートできません。

以前の既知の問題